
夢のように、おりてくるもの

磯崎愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のよしと、おいつぐるもの

【Zマーク】

Z2896P

【作者名】

磯崎愛

【あらすじ】

「夢使い」の青年と大学生。ふたりはコンビニのバイト同士。仲はけつして悪くないけど、ちょっと微妙な距離……。

「夢使い」という職業のある、少し不思議な世界を舞台にしたおはなしです。

(全6話)

自サイト「唐草銀河」からの作者による転載です。

わたしの一日は、夢秤の調整からはじまる。

夜のうちに降ってきた夢は、その番音の振れ具合で秤の傾きを変えてしまつ。先週この安アパートに越してきた起業家のおかげで、わたしの仕事道具は悪夢のほうに傾きやすい。寝る前に悪戯をして少しばかり心棒をざらしておいたのに、滑稽なくらい斜になつてゐる。

どうやら昨夜、隣の男にはよい夢が降りたようだ。アーモンドに似た甘い匂いが残響にうつすらと揺曳している。彼はいま、夢から醒めたに違ひない。わたしは髪をふりはらい、その芳香を胸いっぱいに吸いこんでベッドからおりた。

ふと、この傾斜具合を誰かに見てもらいたいと秤を直す手をとめてみたが、誰に見せるあてもない侘びしい独り暮らしだ。そしてまた、週に一度、依頼があればいいほどの「夢使い」稼業より、日々の真面目な勤労のほうが大事ではないかと、そんなふうにも考えた。田舎にいたころならば思いもしなかつたような発想だ。

よつて、わたしは不精した。一日くらいうつ病をしても秤の調子が悪くなることはないと決め付けて、金と銀に輝く夢秤をそのままにして家を出た。

都會では、夢使いの居場所はたくさんある。たとえば、わたしのようによつては、コンビニエンスストアのアルバイト店員などだ。

『どんな夢でもお望みどおり。あなたの願い、「夢」なら全部かないます!』

店長のすすめでカウンターの端に専用の依頼箱を用意したもの、わざわざ用意してくれたポップの「文句」にはとまどつた。わたしの生まれた土地では、こんなあからさまなことをいつひとはいなかつた。それはたいてい口伝の紹介で、わたしの師匠も一見のお客をとるには年に一度もなかつたはずだ。店長は都會じやこれが流行

りだと笑って取り合わず、箱はその場所に鎮座した。

それからふた月、ぽつぽつと依頼がくるようになった。店長はわたくしの副業を面白がり出勤時と帰りに忘れずに中を確認するよう指示するが、同僚はこちらの横顔を見て面白くなさそうな顔をする。大学生と聞いているので、たぶん、わたしより幾つか年下なのだろう。テレビや雑誌から抜け出してきたように垢抜けで如才ない男の子がいるのだと感心した。

ところが、そんな彼の、女性のように整えられた眉が顰められるのは決まってわたしが依頼書を手にするときのことだった。それを見るたびに、自分が万引きでもしているような嫌な気持ちになった。もちろんわたしは勤務時間にその箱を覗いてみたりすることはないし、仕事の妨げになるようなことは一切していないつもりだ。都会の人間には、この仕事がまじないじみた怪しい行いのように写るのかもしれない。そつは思つてみたが、わたしの気持ちは晴れなかつた。

1話（後書き）

全6話です。

「うひして思い返してみると、彼は帰りがけや休憩のときに自分の得意料理から気に入った映画のはなしをするくせに、夢使いの仕事に関しては一度も口にしなかった。店長をはじめ、たいていのひとびとが真っ先に興味や関心を示すその一点に触れようとしているは、もしかすると夢使いを軽蔑しているかもしない。同じ年頃の気安さがある一方、ひんやりと滑らかな絹の手触りに似て、奇妙に隔てられているようにも感じていた。それが都会のひとりしさかと思つていたが、眞実は、わたしの稼業へのわだかまりのせいではなかろうか。そんなふうに独り勝手に被害者意識をもつて考えることもある。

こんなことを思い悩むのは、今日の昼日中の事件にある。制服をきた女子高生たちが「どんな夢でもって、すぐくない？」とわたしの顔をちらちらと見ながら、頬を赤らめるほど願望を甲高い声で騒ぎ立てた。

たしかに夢みるのは自由だ。それなのに、夢使いのわたしを前にして、頭がおかしいと思われないだろうかと不安な表情で言葉をとめるひとびとをわたしはよく識つている。誰にも迷惑をかけない夢の中でさえ、欲望があらわになることを恐れ、分不相応な想いを恥じるひとびともまた多数いるのだ。いくらわたしがその夢を覚えていられないのだと説明しても、話すことやめてしまうひとびとが。

だから、彼女たちが「どんな夢でも」というところに反応するのはある意味とてまつとうな神経だと思つ。しかしながら、今日のわたしはいたさか虫の居所が悪かったのだろう。いや、この副業がよく思われていないとこつ負い田が、声をあげさせた原因かもしれないと。

わたしはカウンターの外に出て彼女たちの前に立ち、他のお客様の迷惑になると伝えた。感情的にならなによう気をつけたつもりだ

つたが、彼女たちは夢使いに対する侮蔑の言葉を投げつけて、もうこんな店なんて来ないと叫び、走り去つていった。

正直、店に来ないと言われたのには少なからず慌てたが、奥にいた店長からも咎めだてはされなかつた。店長はわたしの謝罪にかるく肩をすくめ無精髪にとりかこまれた脣を歪めて、ま、それは織り込み済みだし色んな人がいるからね、と笑つただけだつた。

それなのに、ロッカールームで独りになると肩が落ちた。あのときは同僚の様子をうかがう余裕はなかつたが、なにも言ってこなかつたことを考えればいい感情はもつていなかつただろう。ひとつに縛つていた髪をほどき、洒落たところもなく流行らない長髪でトラブルの種をかかえこむわたしを彼がどう思つているか想像するといふことをした。

わたしが髪を伸ばすのは音を拾いやすくするために、本当は爪も長めのほうが都合いい。ここでは不潔にみえるのでそれはしないが、わたしのいた土地では夢使いはみなそうしていた。切りそろえられた爪先を見てもれた吐息は熱く、あのときは冷静でいたつもりが、今になって、彼女たちの言葉にひどく傷ついているとわかつた。

ひやしづりに、「物乞い」という言葉をきいた。夢使いに対する一般的な罵倒だ。その昔、夢使いの多くが放浪し、一宿一飯の礼に香音を鳴らした。だんだんに定住するものが増えた今、わたしのように副業とするほうが多いだろう。今ではちゃんと組合さえあるといふのに、物珍しさと異なる能力への反撥ゆえか、差別は色濃くあるようだ。

それでも、数十年前までは、夢使いはもっと生きやすかったそうだ。力のある夢使いは尊崇をあつめ、御殿のような家に住むものもあつたと聞く。もちろん、夢使いは公職につくことはできないし、当時から差別するひともいた。けれど、道化のように思われてはいなかつたはずだ。

田舎よりこの街の相場はずつと高いが、要領の悪いわたしはただ働きのことも多い。実をいえば、わたしに話すことをやめてしまつたひとたち　おのれの夢を他者に明かすことを恥じ、恐れ、忌避しようとしたひとたち　に、彼らの「夢」を届けていた。それはささやかな一夜の慰め、泡のように儂い幸福ではあるけれど、望むことそれ自体は悪ではない。わたしはそう、思つている。

じつさい、無料奉仕をしたとして規則違反となるほどのことではない。それと同時に、そうしたからといって彼らに感謝されるわけでもなく顧客がふえるわけでもない。わたしの自己満足とこの能力を錆びつかせないために練習台になつてもらつたささやかな御礼だといえば、不遜だろうか。

ほんとうのところ、相手の話を聞かなくとも、夢使いには「夢」の香音が聞こえる。もつといえど、わたしには、その「夢」の内容は見えない。つまり、依頼人は「夢使い」に見たい夢の中身を話す必要はないのだが、それは何があつて隠しておかなければならぬ秘密だった。

かつてわたしはその謎を師に尋ねたことがある。師は、わたしの両手の真ん中あたりをじっと見据えるようにしてしわがれ声でこたえた。

それは、依頼人に内省を促すためでも欲望の熱を冷ますためでもなく、ただ、われら夢使いの「アリ知らぬ言霊」を呼び寄せるためのこと

はるか昔、この視界の王たる夢秤王は、香音を聞き分けられるひとびとに視界樹から作られた夢秤を授けることを約束した。爾来、夢使いはひとびとのあがないによつて、視界樹の幹からおりる夢を聞き、そのひとの望む「夢」へと違えづけてくる。

たまに、わたし自身、これが割に合わない仕事だと思つこともあら。ちかごろでは夢自体みることを忘れているひとも多く、廃業する夢使いも多いときく。それでも夢秤を遊ばせておくことはできないし、香音を鳴らし続けねば東から夜が明けることはない。

都會ではそんなことさえ忘れられているように思えたが、それだけで、わざわざ口にする必要もない。畢竟、わたしの不満は誰かに自分を理解してもらいたいといつ、ただそれだけのことなのだ。

「さっきは災難でしたね」
ロッカールームを出たところで同僚に声をかけられて目をしばた
くと、彼はすこし困ったような顔でつづけた。

「おれが出てくとよけい厄介なことになつたと思つんで」

「わたしの仕事の件ですか？」

撥ねつけるような言い方をしたわたしにも、彼は表情をかえずに
つづけた。

「それはそうなんですが。おれのいたところじゃ、夢使いのひとにあ
んな言い方するなんて有り得ないんですよ。その……」

あんなふうに扱われる存在ではないと、そう言つてくれているの
だと察した。彼の故郷では、闇を祓うものとして夢使いが未だに尊
敬されているのだろう。その一言こそてくれた気分は払拭され、
自分が独り勝手に被害者意識に押し潰されていたと察したが、そ
のことは触れず、わたしは気になつたことだけ聞き返した。

「どちらにお住まいでしたか？」

「ずっと北の外れの小さな町です」

「北の夢使いは優秀な方が多いと聞いています」

「あなたは？」

自分が優秀かどうかは正直よくわからない。

「試してみますか？」

彼の切れ長の瞳が大きくなつて、わたしは慌てた。その驚きによ
つて、今の質問は出身地を尋ねられたのだと察したが、もう遅かつ
た。自意識過剰だと思われたに違いない。じつさいその通りなのだ
ろうが、今まで自分から「営業」したことがないというのにこれは
どうしたことだろう。押し付けがましい奴だと思われるのを避けた
いものだ。どうにかして今の言葉を撤回できないかと考えたとき、
彼のことばが耳をついた。

「おれの家、来ますか？」

昔ながらの慣習によれば、それが正しい方法だ。けれど。

「すみませんが、今日は無理です」

夢秤の調整を怠つたまま、家を出でしまつた。無理をすればできなくはないが、そんなことはしたくない。わたしがさりとて説明をしよつと口を開くと、彼が形のいい頭をふつてこたえた。

「その、謝るようなことじやなくて、いきなり誘つてこつちこそすみません。おれのほうは、いつでもいいんです。あ、お互に夜のシフトんときは駄目でしょうけど。まあ、その、ええと、おれはあなたのことが気になるってことだ」

いつも冷静な彼らしくないしどりもどりの言葉に首をかしげると、彼がため息をついてから顔をあげた。

「すみません。はつきり言わないと、あなたみたいなひとには通じないです。たぶんあなたはおれが『夢使い』を嫌つてると思つてたでしょうけど、そうじやなくて、おれはあなたが好きだから、たとえ何もなくとも、あなたが依頼人と一夜をすゞすのがつらいんですよ。そんなのおかしいってわかつてるんですが、でも、ダメなんです。それでわかつたんですが、おれはあなたが好きなんだなあつて」

「待つてください。わたしは依頼人の家に必ず泊まるわけではありませんし、それより何よりも承知でしようけれど、わたしは女性ではありませんよ？」

いまの言葉から察するに、彼はきっと、わたしが依頼を受けるたびに依頼人と一晩過ごすのだと思っていたのだろう。それは完璧な誤解だし、とりようによつては古からづく典型的な「夢使い」への偏見と侮辱にも成り得る。

それについてどう話したらいいか考えようとして、彼の眉が真ん中に寄せられていることに気がついた。それは、不快なものを見せられた表明だと思っていたが、先ほどの彼の言葉から類推すれば、それは純粋に苦痛と悲哀の表現だった。

彼が、こちらの視線をよけるように頃垂れたのを田口にして、愕然とした。わたしもまた、男性が好きになるのは女性だという、偏見をもつていたということに。

夢使いでないひとが香音を聞き分けることができないよう、わたくしが知らなかつただけで、見えていなかつただけで、それは今、ここにある。

彼が下を向いていたのは、ほんの十数秒のことだったのかもしない。けれどわたしは立ち尽くし、ただじつと、息を詰めて彼を見守つているだけだった。

「すみません……今の、聞かなかつたことにしてください。いちおう秘密つていうか、あなたが興味本位で誰かに話すとかは思つてないんですけど……その、帰りがけに変なことで呼び止めてすみませんでした。ほんとはここまで話すつもりじゃなくて、さつき嫌な思いしたんだろうなって、とにかくそれを言いたかつただけで、すみませんでした」

わたしにも、彼がただこちらの気持ちを思いやって、わざわざ口

ツカールームまで出向いてきたのだと理解できた。それに、なんどもスミマセンとくづかえす彼の心中を思うと、いてもたってもいらなくなつた。

「あのっ

「すらりとした背中に、わたしは精一杯の声をあげた。彼はゆっくりと振り返り、緊張した頬のままわたしを見た。

「こんど、よろしければ、あなたの知つてゐる『夢使い』の話を聞かせてください」

「え？」

「たぶん、あなたはわたしの仕事をよくわかつていなつに思います。それはわたしがお話しなかつたせいでもありますし、夢使い全体やこの視界すべての問題でもあるかもしれません。それからもう一點、わたしは修行で手一杯で、恋愛というエネルギーを使いそなつことをしたことがありません。だからあなたの話したに吃驚してしまつて……」

わたしは嘘をついた。恋愛をしたことがないのは本當だが、驚いた理由はそうではない。しかし、それを口に出すことはできなかつた。正直に打ち明けて謝罪する方法を選ぶには、わたしはすでに許しを乞うことも許されぬほど彼を傷つけてしまつたと感じていた。それとも、こうした考えも驕り昂ぶりであつたか。とはいへ、このまま黙つていては彼も困るだろう。なにか言わなければと考えを巡らしていると、彼がおもむろに吹き出した。

「やっぱ、あなた、面白い」

「おもしろい?」

「ええ」

ひとと違つ職業だから興味を持たれたのだろうかと考えて、彼がさきほど「興味本位」という言葉をつかったことを思い出して床をみる。神経過敏になりすぎているのはきっと、わたしのせいだらう。彼はわたしが頭をあげるのを待つてから口をひらいた。

「気を悪くされたなら、すみません。その、ありがとうございます。おれのほうも焦つてあなたを驚かせたみたいだし、この話はまた今度つてことでいいですよね?」

そういうた顔には、さきほどのようにひびきがれた様子は微塵もない。彼はわたしが勢いに押されてうなづくのを確認し、ことばを重ねた。

「ひとつ、いいですか? たしかに恋愛はスルものでしようけど、恋は向こうからやつてくるから防ぎようがないんですよ」

「夢のよう?」

「そう。夢のよう、元気のいいんです」

彼はしかと頷いてのち、あ、夢違えみたいなのはナイですよ、と慌て顔で言い添えた。わたしたちは顔を見合させ、お互に笑いあつた。

彼はそれから、たすがに戻らないとまことに時計を見て、じゃあ氣をつけてと言い残して店のほうへと消えた。

扉がしまる音を聞き終えたと同時に吐息がもれた。しかしそれは、先ほどロッカールームでついたものとは明らかに違う。東の空を眺めて馨しい香音の降りるのを待つ、なにかを期待する予感に似ているものだった。

ずっと、恋とは落ちるものだと思っていた。自身の不注意で陥入

にはまる危険な行為だと感じ、なるべく近寄らないで避けてきた。夢秤を平衡に保つよう、わたしのここりをまっすぐに、または平らかにしておきたいと望んでいた。しかしながら、彼のいうとおり、向いからやってくるのだとしたら、たしかにそれは避けようがない。わたしは幸運にして（それとも不幸にして？）、今まで恋に急襲されたことがなかつたのだろう。

それに、左右どちらにも振れない夢秤は悲しいものだ。それは、誰もが夢をみない、この視界に香音のならぬ証だ。そんなさびしい處にはいたくない。また、馨しく気高い香音だけを聞くほうが多いとも思わない。たとえそれが悪しき夢の放つ腐臭と耳を轟す爆音であろうとも、わたしはそれを聞くことを厭わない。

わたしはきっと、何よりも夢が好きなのだ。わたしが恋をしているとすれば、それは「夢」そのものだ。

足を踏み出してまず思い浮かべたのは、傾いだままになつた金銀の夢秤のことだ。家に帰つてすぐに、あれを調整しないとならない。いつか、誰かにあの傾いだ夢秤を見せて笑う日が来るのかもしない。その相手が彼であるといつ確信もなく、また実のところそうした願望も特にはないようだけれど、そんなことを想像する日がこようとは思ひもしなかつた。

もしも。

もしも恋が、夢のように降りてくるのであれば、わたしはその香音を全身で聞くことだらう。

わたしは「夢使い」。

夢のように降りてくるものを拒めるはずがない。

(終わつ)

6話（後書き）

最後までおせわなくごくだかこましへいつもあつがとつぱりおせわ。
いつか、機会があれば「店舗」のおせなしが書きたいな、と。
(このふたりのらぶらぶじやなことじが//ンミ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2896p/>

夢のように、おりてくるもの

2011年4月27日20時55分発行